

活動などの生活の諸側面にカテゴライズできないことを強調する。そのため、彼はキリスト教宣教により先住民の生活が変化し、それに伴いアダットが消失することを危惧していた。一方リーチは、アダットに関して信仰や儀礼にはそれほど注目せず、植民地政策への経済的效果に重きを置いた視点がうかがえるのであった。しかしながら、ハリソンは、アダットの中にも良いもの悪いものがあると考えており、アダットの保存と消失に対しては、ジレンマを抱えていることもまたうかがえるのであった。

## タイ上座仏教と行政事業

矢野 秀 武

### 一 はじめに

本発表では、中心的事例としてタイ教育省の事業である仏教式学校事業、その比較事例として他の省庁が行っている宗教関連事業に言及する。本校の目的はこれらの事例を官制仏教という視点からとらえ、サンガの仏教や民衆の仏教とは異なるタイプの仏教がタイに存在していることを示すことにある。

### 二 仏教式学校事業（プロジェクト）

仏教式学校 (Rongrian withii phut) タイ教育省基礎教育委員会事務局内の教育運営イノベーション開発課が担当する事業で、二〇〇二年二月二五日に始まり今日まで続いている。二〇〇六年時点で全国三万二四一一の中小高校の六三・一%がこの事業に参加している。事業企画運営の中心を担った人物とし

ては、思想面では、現代タイを代表する学僧パユット師、手法の面では、仏教式のホリスティック教育を行ってきた私立幼稚園、コーディネーターとしては、教育行政官僚と仏教大学の学僧などがあげられる。

仏教式学校とは、内容に即して意識すれば「仏教原理に基づく学校」、「仏教理念に基づく教育運営」といえるものであり、学校で仏教を教えるのではなく、学内にとどまらず家庭や地域社会や寺院も学習・教育の場ととらえ、様々な教科教育・生活実践に戒定慧の三学を応用する、仏教的なホリスティック教育である。

具体的には、給食などにおける食育を戒定慧に即して実践すること、村の生活向上につながる活動を社会科授業で行い、村人の伝統にある戒の実践を学び、慈悲と智慧の実践につなげるといったことなどもなされている。ただし、名目的な参加にとどまる学校も多く、タイの学校で以前から一般に行われている瞑想や読経を行う程度もケースも多い。

このような行政事業が展開された背景には、一九九七年の通貨危機の経験から、グローバル化に対応した人材育成を重視する教育改革が行われたことと、この教育改革に対して、知識偏重や仏教を軽視する傾向があると反対意見が出てきたことがある。

### 三 遠景 他省庁の宗教関連事業

このような宗教関係の行政事業は、他の省庁でも多様な形で行われている。宗教関連事業を中心に行っているのは、国家仏教庁と文化省宗教局であるが、前者は二八事業（二〇〇五年）、

後者は三七事業（二〇〇四年）の宗教関連事業を持ち、これ以外に教育省その他の国家機関が部分的に宗教事業を行っている。つまり、仏教式学校事業はこれらの諸事業の一つに過ぎない。一方、これら宗教関連事業は、全体として統一されたものではないが、全国的に標準化され均質的な活動を展開している。

#### 四 結論

本発表ではこのような行政の宗教（仏教）事業を、官僚をコーディネートとし、外部組織とつながり、省益局益と関わる多数の行政事業の集合体ととらえ、国教や国家仏教という用語に代わって、官制仏教と名付けている。これは市民宗教のうち為政者・エリート層の仏教・道徳・秩序意識の伝統と深くかわるものであり、また、ライシテが一定の状態とどまる状況や、ライシテ研究では見落とされてきた王制・王権の宗教性の問題にも関わるものと考えられる。

#### 翻訳と布教

——タイにおける天理教の事例から——

永松 和 郎

日本の新宗教における海外布教に関する研究は日本起源の宗教が異なる文化圏での布教活動においてどのようなプロセスを経て受容、展開しているかを研究対象とするものであった。本発表ではそれらの研究ではあまり扱われてこなかった、「翻訳」に注目し、天理教という日本起源の宗教教義がいかにして、異

文化圏で翻訳され、布教されているのかをタイの事例を通じて見て行くことである。

一般的に「翻訳」とは「ある言語から他の言語へ、思想、感情などをそのまま量を増減することなしに移し運ぶ」という意味である（井上昭夫『世界宗教への道―異文化伝道入門』日本地域社会研究所、一九八二）。しかし翻訳をする場での議論は「逐語訳と意訳」「原文重視と訳文重視」「作者重視と読者重視」などの議論が盛んに行われていた。しかしこれが宗教教義の翻訳となると事態は異なる。宗教教義の翻訳では聖典などを翻訳する際に「神の言葉」としての役割があるため訳文より原文が重要視されるのは当然のことであろうし、作者と読者という関係性を見ても作者（＝神、教祖など）を重要視するのが当然のことと言えよう。宗教によって「翻訳」に対する概念は様々である。これは聖典、教典などと呼ばれる書物に対する態度が異なるからである。聖典や教典などは神、教祖などの言葉が記述されているため、原作者の立場に語学力だけではなく、信仰を持って接近しようとする試みが重要となるであろう。またこのような試みが教義翻訳に対する態度であり、翻訳を行う上で他の翻訳とは異なる条件と言える。

タイにおける天理教の布教活動は一九四三年に二代真柱・中山正善（一九〇五―一九六七）の発案により視察調査という形で二名がタイに五ヶ月間滞在したことが最初となっている。現在天理教は一九八二年にタイ教育省宗教局から布教認可証の交付を受け、文化活動のための組織として社団法人を設立し活動を展開している。